

## 近世の旅観と街道の変容 — 参宮と大和めぐり —

安 田 真紀子

### はじめに

近年、街道や旅に対する関心の高まりもあって、交通史も多岐の分野にわたって研究が進められている。中でも、旅のルート・観光コースに関する研究は、歴史学のみならず、地理学や観光学の見地からも注目されてきている。<sup>1)</sup>

奈良・三重間においても、伊勢街道を中心に実地調査や参宮ルートの研究が行われ、その成果も報告されている。<sup>2)</sup> 一方で、開発や荒廃等により街道のルートや存在も曖昧になってきつつある。また、同一の街道であっても地方によって呼称が異なっており、研究者や自治体等によって、各街道にさまざまな名称が付けられた結果、混同を招き、街道自体の姿をより複雑なものにしている。

そこで、本稿では、今一度、江戸時代の和和における伊勢街道の整理を行い、道中案内記類から、大和と伊勢を結ぶ参宮ルートの変遷や、参宮と大和巡りとの関係について事実を確定し、考察したい。とくに、伊勢参宮に古くから利用されていた「伊勢本街道」を中心に、現地調査も踏まえて考察を加え、その歴史的な位置付けを明らかにしていきたい。

### 一、伊勢本街道の呼称

大和より伊勢へ向かうおもなルートとしては、伊勢北街道・伊勢本街道・伊勢南街道の三街道が知られている。伊勢北街道は、宇陀郡萩原(榛原町)より名張を経て、青山

峠を越え、六軒（三重県松阪市）へ至つて、津からの参宮街道と合流するルートで、伊勢表街道とも青越え道とも呼ばれている。伊勢本街道は、萩原で北街道と分かれ、宇陀郡内をほぼ真東に進み、飼坂峠を越えて田丸（三重県玉城町）經由で伊勢に至る。また、伊勢南街道は、南和や和歌山方面からのルートとして利用され、吉野川沿いに東進し、高見峠を越えて、田丸で本街道と合流する。なお、大和・伊勢間の街道については、「図一」に示した。

これらの三街道は、伊勢へ向かう道という意味で伊勢街道と称されており、いずれも大和側からの呼称である。伊勢側からは、伊勢北街道・伊勢本街道の場合、大和街道または長谷寺への参詣道との意味合いから初瀬街道と呼ばれることが多く、伊勢南街道の場合も、和歌山へ至る道という意味で、和歌山街道と呼び慣わされている。これは、目的地名を冠して街道の呼称として使用するという近世の慣例によるものである。したがつて、伊勢へ向かう道、伊勢参宮に利用された街道はすべて伊勢街道であるが、なかでも大和を通る主要な三街道について、個別の呼称が付いたものと思われる。

では、現在一般的に使用されているこれらの名称は、い

つ頃から見られるのであろうか。『伊勢本街道―奈良県歴史の道調査報告書』によると、伊勢本街道の名称は近世におけることである。そこで、江戸時代<sup>16</sup>に出版された道中案内記類をみてみると、伊勢本街道の場合は「田丸越」と記されているものが最も多く、「長谷越」「あかばね越」「かい坂越」の記述も見え、後述のように嘉永期からは「伊勢本街道」という名称の使用も認められる。一方、伊勢北街道の場合はほとんどの道中案内記において、「あを越え」と記されている。これは、青山峠越え、あるいは阿保經由という意味と思われるが、他に、六軒を經由することから「六軒屋越」、名張經由の意味から「なんばり越」とも称されている。また、伊勢南街道については、伊勢参宮道としての利用が少ないためか、道中案内記類に記載されていない場合が多いが、『西国順礼道中細見新增補指南車』（文政十二年刊）では「川はた街道」と記されており、「川俣街道」、あるいは高見峠を越えることから「高見越」と称されていたようである。なお、道中記類にルート記載のある街道について、冠せられた名称をまとめたものが「表1」である。

このように、江戸時代の道中案内記類を管見した限りでは、伊勢北街道・伊勢南街道の名称は見あたらない。おそ

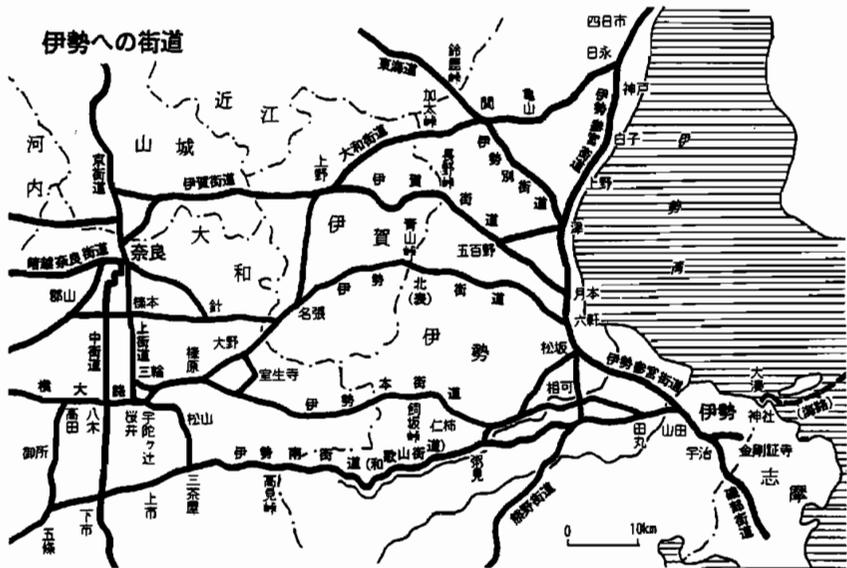


図1 伊勢への道 (奈良大学 鎌田研究室編『宝来構道中細見記』より)

らく、この二街道の名称は、近代になって、大和を東西に通る三つの主要な伊勢街道を区別するために便宜上付され、「伊勢本街道」という既存の名称を軸にして、各街道の位置関係から北街道・南街道と称されるようになったのではないだろうか。

一方、前述のように伊勢本街道の名称については、江戸後期の道中案内記などに記述が見え、すでに江戸時代に固有の名称として使用されていたものと思われる。管見したところでは、嘉永五年(一八五二)刊の『浪花講定宿帳』に、「はい原より伊勢本街道田丸越」とあり、明治初期の『一新講定宿帳』にも、萩原宿の項に「右本かい道いせへちか道、左あをこへ」とある。また、明治四十三年(一九一〇)改正の『神風講社一新講社定宿帳』の萩原宿の項でも「此所わかれ道あり、宿にて御尋ね、右伊勢本街道、左あを山ごへ」の記載があり、幕末から明治にかけて伊勢本街道の名称が使用されていることが窺える。

そのほか、伊勢本街道沿いに現存する道標や常夜灯からも、伊勢本街道の名称が認められる。本街道と北街道の分岐点である榛原町萩原の札ノ辻には、文政十一年(一八二八)建立の道標が残っており、その銘文には「右いせ本か

い道」「左あをこ江みち」と刻まれている。また、三重県多気町相可に存する文久三年（一八六三）の道標には、「右くまのミち」「伊勢本街道」「すくならはせ道」とあり、伊勢市川端町に残る常夜灯の竿石にも「本街道川端西入口」「本街道是より外宮迄廿八丁」とみえる。この常夜灯は、二基一対となっており、いずれも文政十三年（一八三〇）の銘を持つ「いせ両宮一里燈」である。伊勢本街道の起点ともいえる萩原と、最終の宿場である川端に、伊勢本街道と記された道標・常夜灯が存在していることの意義は大きいのではないだろうか。これらの碑文などから、大規模なおかげまいりが発生する文政年間には、伊勢本街道の名称が認知されていたものと考えられる。

しかし、江戸前期の地誌や案内記では、いわゆる飼坂越えの伊勢本街道以外に「本街道」という名称の使用例がみえる。たとえば、貞享四年（一六八七）刊行の『奈良曝』に、「奈良より方々への道法」として次のようなルートが示されている<sup>16</sup>。

一、ならよりいせまで本街道

なら坂より北へゆき、一の坂村、出海道村、木津村、玉水、ながいけ、宇治、六ぢざう、大津、草津、い

しべ、ミな口、つち山、坂の下、関の地蔵、むくもと、いせのつ、雲津、まつ坂へゆくなり。

一、ならより長谷海道にかゝりて伊勢へ行にハ、

ならかい千づか口よりいて、長井、柴や、くらの庄、いちのもと、いその上、田部、江原城、丹波市、柳本、辻村、岩田村、金屋村、くろ崎、おき村、初瀬、吉提村、角筋、萩村、松牧村、赤不致村、諸木野、田口村、山かす村、桃股村、土原村、菅野村、高末、杉本村、田家村、ミがき谷、大石村、つる村、大岡村、田丸村、宮川、下宮迄、内宮迄

一、ならより伊賀海道をへて伊せへ行にハ、

賀茂、かさぎへ二里、大川原迄一里半、嶋がはら一里半、上野へ二里、山田へ二里、阿波へ三里、永野へ二里、ひさひへ四里、松坂へ三里、おはだへ四里、中川原へ、いせの誉田へ、内宮へ

このように、『奈良曝』では、奈良から伊勢への道筋として三つのルートがあげられているが、現在伊勢街道と称されている三街道とはルートを異にする。まず第一に、奈良から京街道を長池まで辿り、宇治より大津へ出て、東海

道を經由し鈴鹿峠を越えて、関からいわゆる伊勢別街道で松坂へ至る行程が示されており、これを「本街道」と称している。一方、銅坂越えの伊勢本街道は、初瀬街道經由というかたちで第二のルートにあげられ、第三ルートには長野峠越えの伊賀街道があげられている。東海道鈴鹿越えの行程を本街道とする例は他でも見られ、大坂からの例ではあるが、宝暦十三年（一七六三）に発行された『伊勢道中細見記』<sup>17</sup>でも「大坂より本街道之記」として、東海道鈴鹿越え伊勢別街道ルートを第一に紹介し、次いで「大坂ヨリ大和越伊勢田丸街道」、さらに「大和国萩原ヨリ阿保越道中」を掲載している。

これらの例によれば、本街道の名称は、東海道鈴鹿越え伊勢別街道の参宮ルートを指していることとなる。しかし、この場合の本街道は固有の名称ではなく、主要道といった意味で用いられているのではないだろうか。大津より関に至る鈴鹿越えのルートは、平安時代より室町時代に至るまで、京都からの京宮群行路として機能しており、江戸時代にも京都からの参宮にはこの東海道鈴鹿越えのルートが利用され、「本街道」と称されている。<sup>18</sup>つまり、本街道とは基幹道である東海道を指し、東海道を利用するルートとい

う意味で、『奈良曝』においてもこの呼称が使用されたのではないだろうか。江戸前期においても、東海道には宿駅や街道設備が整っており、第一番目のルートにあげられたと考えられる。しかし、この東海道鈴鹿越えルートが、奈良からの参宮道として一般的に利用されたのは、ごく限られた期間であると思われ、江戸中期以降の諸書にこのルートは見あたらぬ。

以上のように、銅坂越えのルートを指す「伊勢本街道」の名称は、『奈良曝』で使用された「本街道」とは異なった意味で用いられている。後述するが、江戸時代後期から参宮者の往来が増加し、大和・伊勢間の移動にも複数の街道が利用されるようになってくる。その過程で、中世以来伊勢参宮の利用が多い、銅坂越えのルートを「元来の道」あるいは「旧来の道」という意味で、伊勢本街道と称するようになったのではないだろうか。たとえば、享保二十一年（一七三六）に刊行された地誌『大和志』<sup>19</sup>（『日本輿地通志』畿内部）に、官道として伊勢本街道ルートの記載がみえるが、その末尾に「又、自萩原至長瀬属邑上野二里許、上野至長瀬二十四町、通于伊州名張郡阿部田村、謂之新路」とあって、これは伊勢北街道を指すものと思われる。この

文面からも、伊勢本街道が旧道、伊勢北街道は新道と捉えられていたことがわかる。伊勢北街道の利用が多くなるにしたがって、飼坂越えのルートが、伊勢本街道と呼称されるようになっていったのではないだろうか。

## 二、道中案内記類にみる奈良・伊勢間の

### 参宮ルートの変遷

では、江戸時代に出版された道中案内記類において、大和・伊勢間の伊勢街道はどのように位置付けられているのだろうか。その記述から、主要ルートの変遷を辿ってみてい。

地誌および道中案内記類にみえる、大和・伊勢間の街道については〔表1〕の通りである。全国的な案内記の場合、参宮ルートは東海道を基本として、四日市からの参宮街道と、関からの伊勢別街道を利用するコースが優先的に掲載されている。これは、江戸または京都方面からの東海道利用者への利便性を考慮したものと思われるが、〔表1〕では大和・伊勢間の移動に限っての利用ルートを採取した。

先にも触れたように、江戸前期には、奈良からの参宮ル

トとしても、東海道を利用する行程が第一に示されていたが、享保期以降の案内記類には、このコースはみられない。おそらく、社会が成熟するにつれ、人々の移動も増大し、諸道の整備も進んだ結果、奈良から一旦北上して東海道を迂回するルートよりも、一旦南下して三輪から真東にすすむ最短距離のルート、すなわち伊勢本街道が利用されるようになってきたのではないだろうか。また、伊勢参宮と初瀬・吉野・高野参詣などが一連のものとして行われるようになった結果、伊勢本街道や伊勢北街道の利用を促す案内記が増えたのではないだろうか。

〔表1〕からもわかるように、伊勢本街道は江戸前期より案内記類に散見され、江戸時代を通じて登載されている。このように伊勢本街道が支持された理由は何であろうか。明和五年（一七六八）の『幸講定宿帖伊勢道中案内』<sup>20</sup>には「俗説に日く、始めて参宮する人かい坂をこゆる事、神の御心に叶ふと云ふ故、はせ田丸越を参り道とす」とあり、伊勢本街道を信仰の道として優先的に掲げているようにみえる。

また、享保五年（一七二〇）再版の『諸国案内旅雀』では、「初瀬より伊勢へ之道」として、初瀬から飼坂越えのル

表1 道中案内記類にみる伊勢街道

奈良く伊勢間のルートについて、行程や里数など内容の記載のあるものを取り上げ、各ルートの呼称(標題)を掲げた。行程図のみの道中絵図・案内図については対象外とした。備考欄に「道中記集成」とあるのは、今井金吾監修『道中記集成』(全44巻、大空社刊)を指す。

No	史料名	刊行年	伊勢本街道	伊勢北街道	伊勢南街道	伊賀街道	備考
1	奈良曝	貞享四年	長谷海道			伊賀海道	ほかに「ならよりいせまで本街道」(鈴鹿越)の記載あり
2	諸国案内旅雀	享保五年	初瀬より伊勢へ之道			大和郡山より伊勢山田へ之道	初版は貞享四年 『道中記集成』5所収
3	諸国海陸道中記	延享四年	長谷へ田丸こへ <small>田より</small>			いせ山田へ 伊賀こへ <small>より</small>	『道中記集成』8所収
4	伊勢道中行程記	寛延四年	大坂より初瀬街道				『道中記集成』9所収
5	伊勢道中細見記	宝暦十三年	大坂ヨリ大和越伊勢田丸街道	大和国萩原ヨリ阿保越道中			奈良大学史学科蔵
6	伊勢参宮細見大全	明和三年	大坂より大和越伊勢田丸行程	阿保越行程			奈良大学史学科蔵
7	伊勢道中記(太神講)	安永四年	田丸越				『道中記集成』13所収
8	東海両道中記	天明六年	長谷へ田丸こへ <small>田より</small>			いせ山田へ 伊賀越 <small>より</small>	『道中記集成』17所収
9	大和巡りひとり案内図	寛政八年	山田よりはせ田丸こへ	山田よりはせあをこへ			『道中記集成』38所収
10	七さし所為旅行便覧 遊するべし	享和二年		あを越		奈良より伊勢山田へ 伊賀越	初版は宝暦十一年。初版に伊賀街道は記載なし。 『道中記集成』19所収
11	旅行用心集	文化七年	伊勢ヨリ田丸越			伊勢ヨリ大和廻り奈良吉野高野道	奈良大学史学科蔵

23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	No
東海道秋葉風采寺伊勢 參宮大和七在所高野山 道月本南都越定宿附	定宿附道中記	東講商人鑑	浪花講定宿帳	大日本細見道中記	天保 新增西国順礼道中細見 大全	東海 越路細見道中記	大日本諸国道中案内記	浪華組道中記	諸国道中袖鏡	西国順礼 道中細見 新增補指南車	新版諸国道中細見記	史料名
(天保頃カ)	(寛政頃カ)	安政二年	嘉永五年	嘉永四年	嘉永二年	天保十四年	天保十二年	天保十年	天保十年	文政十二年	文政二年	刊行年
		はせヨリ田丸越伊勢 海道	はい原より伊勢本街 道田丸越	伊勢山田より田丸越 長谷道	(大坂より) 大和越田丸街道	伊勢より田丸越道	京ヨリ大和巡り高野 道并伊勢參宮道		いせ 山田より はせ田丸こへ	いせより中海道	伊勢ヨリ田丸越	伊勢本街道
(月本南都越)		大坂ヨリ大和奈良三 輪長谷ヨリアを越伊 勢參宮道	大坂より伊勢參宮道	參宮より阿保越大和 巡りよしの高野參詣 大坂迄	あほ越道法			大坂よりいせ道中		あを越はせ道		伊勢北街道
										いせより高野山へす ぐ道・川はた街道		伊勢南街道
	伊勢より大和奈良吉 野高野道	奈良ヨリ伊賀越月本 マテ	奈良より伊賀越并か ふと越道	伊勢月本より伊賀越 奈良道		伊勢より大和奈良吉 野高野道	京ヨリ笠置越上野道		いせ山田へ伊賀こへ道	いせよりいがこへ大 坂ミチ	伊勢ヨリ大和廻り奈 良吉野高野道	伊賀街道
奈良県立大学蔵	『道中記集成』39所収	『道中記集成』41所収	『道中記集成』41所収	『道中記集成』40所収	『道中記集成』27所収	『道中記集成』29所収	『道中記集成』28所収	『道中記集成』39所収	『道中記集成』26所収	『道中記集成』24所収	『道中記集成』21所収	備考
					原版は文政八年。増修 版は天保十一年。					再版		

No	史料名	刊行年	伊勢本街道	伊勢北街道	伊勢南街道	伊賀街道	備考
36	伊勢みやげ旅寝之友	明治二十三年		初瀬街道阿保越		伊賀街道長野越	『道中記集成』37所収
35	明治新刊 伊勢道中細見記	明治二十三年		参宮下向阿保越にて 大阪に出る順路			『道中記集成』37所収
34	一駅程明鑿 新改正道中記図会	明治十五年		大阪ヨリ大和伊賀越 ニテ伊勢道			『道中記集成』36所収
33	西国旅便利	明治十二年		大坂ヨリならあをこへ			奈良大学史学科蔵
32	皇国道中早見一覽	明治十一年		大坂ヨリ伊勢へ			『道中記集成』35所収
31	袖珍一新道中記	明治十年		大坂ヨリ奈良ヲヘテ イセマテ			『道中記集成』35所収
30	道中細見定宿帳 (浪花講)	明治三年	はせより田丸越いせ 道	大坂よりならばせい せ道		ならヨリ上野通月本 迄并上野ヨリ東海道 関迄	『道中記集成』43所収
29	千嶋講定宿附	(江戸末カ)	はい原より田丸こへ ミチ	京より大和廻りいせ ミチ		ならよりのいがこへミ チ	『道中記集成』42所収
28	朝日講定宿帳	(江戸末カ)	山田よりたまる越	山田より六けんあを 越		いせ月本よりのいが越 ならより大坂ミチ	『道中記集成』42所収
27	浪花講定宿帳	(江戸末カ)	はい原より伊勢本街 道田丸越	大坂より伊勢参宮道		奈良より伊賀越并か ふと越道	奈良大学史学科蔵
26	東海道秋葉鳳来寺伊勢 参宮大和七在所高野山 道長谷南都越定宿附	(江戸末カ)		(長谷南都越)			奈良大学史学科蔵
25	五海道中細見独案内	(安政頃カ)	和国はせミチ	いせ海道六けんより はせ道		奈良より伊賀越久る より月本迄	『道中記集成』32所収
24	浪花講定宿附	(天保頃カ)	伊勢ヨリ田丸こへ大 和ミチ	東海道四日市追分よ りいせ参宮大和坂 マテ		伊勢月本こへいかこ へ奈良道	『道中記集成』39所収
No	史料名	刊行年	伊勢本街道	伊勢北街道	伊勢南街道	伊賀街道	備考

No	史料名	刊行年	伊勢本街道	伊勢北街道	伊勢南街道	伊賀街道	備考
37	改正三都講定宿帳	(明治初カ)		(行程の記載はあるが、名称はなし)			〔道中記集成〕43所収
38	浪花講いせ道中記	(明治初カ)		(行程の記載はあるが、名称はなし)			〔道中記集成〕44所収
39	大川組定宿帳	(明治初カ)		(行程の記載はあるが、名称はなし)			〔道中記集成〕44所収
40	改正浪花講定宿帳	(明治初カ)		はせなら大坂みち			〔道中記集成〕44所収

トが示されているが、この中の萩原宿の項に「宿中ニをいわけ有、道より右ニあたり、なんばり越とていせへ行道有、此海道長谷越より切所はこれなきよし也、松坂の近辺へ出ル」との記載がある。ここでいう「なんばり越」とは青越えの伊勢北街道を、「長谷越」とは銅坂越えの伊勢本街道を指しており、本編では伊勢本街道を案内しながらも、伊勢北街道のほうが難所がないと、こちらを勧めるような記述がみられる。

青山峠を越える伊勢北街道は、伊勢地・垣内間の青山三里(標高五一〇メートル)が難所とされるのみであるが、銅坂越えの伊勢本街道は、大小八つの峠が存在し、榑田川の津留渡しなどの難所も多く、標高も高い所では六九五メートルに達する險路である。それゆえ、厳しい旅が予想され

るだけに、踏破の際には神意に叶うとされたのであろうか。というよりもむしろ、伊勢神宮参拝という目的を果たすことのみを念頭に旅をせよという意味で、最短かつ山間ルートである伊勢本街道を、神意に叶う道と表現したのではないだろうか。また、中世以来伊勢参宮・長谷参詣路として利用されてきたという歴史的な経緯や、伊勢信仰と初瀬信仰の結びつきによる隔夜僧の移動に使用されたことなども、伊勢本街道を優先的に案内する要因にあげられるだろう。

また、宝暦頃から天保期にかけては、伊勢北街道を登載していない案内記が少なくないが、実際には明和頃から、伊勢本街道より伊勢北街道へ、その利用が移行していったものと思われる。桜井市に残る「年々珍事記」明和六年(一七六九)の記事からは、伊勢本街道から伊勢北街道へ

の利用者の移行が窺える。

此度伊勢之様子聞書

一 上海道筋 星津川渡シ老人前老銭宛取ル、八月晦日より九月三日迄毎日四拾貫文ツ、落ル、此筋凡人數積り毎日四万人程ニ見ル、夫ヨリ阿保越參詣人六軒ニ而出合、いなぎの渡し橋又老人前ニ老銭ツ、取ル、右四日之間毎日此処ニ而八拾貫文ツ、落ル、人數凡八万人ツ、見ル

一 中海道筋田丸宿ニ而紀州・和州・八鬼山三ヶ所出合、人數凡北ノ上海道筋之三歩ニ積り見ル、此筋銭取之渡し橋等無之三付、委ハ不知、見物大積り凡二万六七千人程か、東海道筋之義ハ不知、右四日之間伊勢へ入込候人數積り難斗、扱々夥數參詣也

これは、おかげ参り流行の二年ほど前の参宮に関する記録であるが、ここでいう「上海道」とは伊勢北街道、「中海道」とは伊勢本街道と考えられる。この記録によれば、伊勢本街道田丸宿の通過者は、伊勢北街道の三分の一程度とあり、明和頃から徐々に伊勢北街道の利用が多くなつていったことがわかる。

また、参宮の例ではないが、明和九年（一七七二）三月、

松坂より吉野を遊覧した本居宣長は、往路伊勢北街道で大和へ入り、復路は萩原の宿で悩み抜いた末、伊勢本街道で松坂へと戻っている。『菅笠日記』（寛政七年刊）に表わされた、その時の萩原での宣長一行の会話は、伊勢北街道の利用が増加していく傾向にあつたことを思わせる。少々長文であるが、紹介する。

これよりこへるさは。道かへて。まだ見ぬ赤羽根ごえとかいふかたに物せんといひあはせて。ともなるをのこに。かうく／＼なんといへば。かしらうちふりて。あなおそろし。かの道と申すは。すべてけはしき山をのみ。いくへ共なくこえ侍る中にも。かひ坂ひつ坂など申して。よにのみしき坂どもの侍るに。明日は雨もふりぬべきしきなるを。いと／＼しく道さへあしう侍らんには。おまへたちの。いかでかかやすくは越給はんとする。さらにさらに。ふようなめりといふをきげば。又いかゞせましと。みな人心よわく思ひたゆたはる、を。戒言大とこひとり。いなとよ。さばかりおそろしき道ならんには。絶てゆく人もあらじを。人もみなゆくめれば。なにはばかりのことかあらん。足だにもあらば。いとようこえてんと。つゆききおぢけたるけしき

もなく。はげましいはるゝにぞ。さは御心なゝりとてをりぬ。

伊勢本街道は、行程をよく知る者にとつても、難路とされてきたようであるが、本文にもあるように、利用者がなければ廢道となるはずである。しかし、明治初期まで案内記類には登場しており、伊勢への最短ルートとして機能していたと思われる。

では、なぜ伊勢本街道の利用が減少し、伊勢北街道へと移行していったのだろうか。享和二年（一八〇二）再版の『七ざい所巡道しるべ旅行便覧』には、伊勢から大和へのルートについて次のように紹介されている。

伊勢山田より大和へ行道三筋あり。田丸より行、長谷へ出を、田丸越とも、長谷越ともいふ。六軒屋より行て、是も田丸越と同、長谷へ出を、六軒屋越とも、あを越とも、はせ越ともいふ。田丸越よりハ行程壹里半ほど遠けれども、道筋宜敷故、皆人此道を通といへり。つきもとより行、伊賀の上野を通、奈良へ出を、つきもと越とも、いか越とも、奈良越ともいふ。

また、江戸時代後期に、吉野郡上市の金紅丹店より発行された『大和巡獨家内道中絵図』（刊記なし）にも、伊勢

北街道の利用を促す記述がみえる。

はい原 此所よりいせ參宮道二すじあり。中海道といふを行バ、勢州田丸へ出るなり。但シはい原より宮川迄廿二り余。あをこへといふを行バ、勢州六けんへ出るなり。但シ宮川迄廿六り半。少々道遠けれども弁利よし。

『七ざい所巡道しるべ旅行便覧』においても『大和巡獨家内道中絵図』においても、青越えの伊勢北街道のほうが距離は長いが、道も良好で便利であると支持している。

江戸時代、青越えの伊勢北街道は、一部地域を除き、津藩領である。いわば、津藩の官道と位置付けられ、津藩策によって街道の整備が行われている。たとえば、伊勢地・垣内間の峠道を付け替えたり、困窮に苦しむ新聞地新田村の救済策として、名張と阿保間の街道通行を小波田越えから新田経由へ変更し、迂回を強要したりしている。

また、前掲の『伊勢道中細見記』（宝曆十三年刊）には、萩原宿の項に「札の辻を左へ行バ阿保へ道、すぐに行ハ赤ばにかいどう也。是より田丸までハ馬借問屋なし」「あほこへハならよりいせ松坂への往来なれば道中筋に馬多し」と、その利便性の違いが述べられている。しかし、伊勢北

街道への誘導増加の要因は、街道施設整備だけの問題であらうか。

伊勢本街道は、「朝日講定宿帖」(刊記なし)に「山田よりたまる越。この海道ちか道候へとも、少し山道ニ御座候。とかくぜにのいらぬ道中ニ御座候」とあるように、山間を通るため大規模な宿場や町場が少なく、旅行者にとっては楽しみが少ないルートであった。それに比して、伊勢北街道には、名張・阿保という伊賀国の二大商業地が存在しており、その点も、旅行者を惹きつける材料となったのではないだろうか。

幕末には、伊勢北街道を優先的に記載した案内記も多くみられるが、これは化政期頃より庶民のあいだに訪れた旅行ブームが影響しているものと思われる。旅が大衆化することにより人々の興味も多様化し、伊勢参宮に対して信仰への関心が薄れ、参宮だけが目的ではなくなった結果、伊勢へと直行する最短ルートの伊勢本街道よりも、町場を通りゆつくりと旅のできる伊勢北街道の需要が高まったのではないだろうか。伊勢街道変遷の背景には、庶民の旅に対する意識の変化があるのではないか。庶民の旅のイメージが、修行から娯楽に変化していった結果が、街道の利用に

も反映されたものと考えられる。明治期に入ると、伊勢本街道を掲載する案内記は急速に減っている。

また、伊勢北街道・伊勢本街道の記載に加えて、長野峠越え及び加太越えの伊賀街道を記載した案内記が非常に多い。とくに、月本から分かれて長野峠を越え上野に至る長野越えの伊賀街道は、伊勢参宮を終え、いわゆる大和めぐりに向かう道筋として利用が多かったようである。ならびに、加太越えは、大和諸大名の参勤交代路でもあり、幕府によって、脇往還として位置付けられている。また、大和から東海道江戸方面への間道としての利用も多いため、積極的に登載されたものと思われる。

反対に、伊勢南街道の記載がほとんどみられない。これは、南和や和歌山方面からの参宮に利用が限られたことや、高見峠(標高九〇四メートル)が、冬期には積雪、夏期には繁茂する草木によって通行に困難を極めたためと思われるが、それに加えて、大和めぐりとの関係や、高野参詣・西国巡礼ルートとの関わりが考えられる。

次章では、伊勢街道と大和めぐりとの関係について考えてみたい。

### 三、参宮ルートと大和めぐり

〔表一〕にも示したように、道中案内記類においては、

「奈良より伊勢へ」の順路を示したものと、「伊勢より奈良へ」の道順を示したものが存在する。これは、版元

（発行者）の所在地や作成された目的などによって変わってくると思われるが、利用者の便を考慮して作成されているはずである。事実、大和・伊勢間の記述に限っても、一ルートのみを示したものはきわめて少なく、往路と帰路のルートを変えて記したものが、参宮後他所の名所観光へと誘導したものが多くみられる。小野寺淳氏の研究によれば、関東からの参宮者の場合、往復同じ行程を辿る例はほとんどみられず、多くは参宮後、西国巡礼や奈良・大坂・京都などの寺社旧跡めぐりに出かけたようである。<sup>33)</sup> 道中案内記類においても、伊勢参りに、大和めぐりや西国巡礼、金毘羅参詣などを組み込んだものが多い。

前掲『七ざい所巡道しるべ旅行便覧』の叙に「伊勢参宮して大和の寺社を巡、高野へ行、住吉天王寺石清水へ詣、宇治伏見を見て京へ上り、三井寺石山を巡終として帰る。

是を七ざい所巡といふ」とあり、江戸中期には、参宮の帰路に近畿の社寺を巡る風習が存在していることがわかる。同書は享和二年（一八〇二）の再版であるが、初版本は宝暦十一年（一七六一）に出ており、宝暦年間にはこのようなコースが完成していたと思われる。

実際に参宮を目的とした旅の記録である道中日記からは、伊勢参宮が西国巡礼や奈良・大坂・京都などの寺社旧跡めぐりなどと併せて行われていたことが窺え、とくに東国からの参宮者は参宮後、大和めぐりと称して奈良・初瀬・竜田・吉野などを遊覧しているケースが非常に多い。<sup>35)</sup>

では、参宮後大和への移動ルートとして、伊勢街道はどのように利用されていたのだろうか。参宮と大和観光の関係についてみてみよう。『七ざい所巡道しるべ旅行便覧』は前述のように、伊勢から大和・高野・大坂・宇治・京・大津を順番に廻るように編集されているが、大和めぐりに際しては、「大和巡をはせ越ハ長谷より初、なら越ハ奈良より初て、いづれも吉野にて巡終なり。伊勢山田より吉野迄行程、なら越ハ式里余遠し。是ハ少の事なればいふにもたらざれども、奈良より初てハ、いそのかみ帯解等其外此辺の見所数多はづれ、又八木より阿部へうつる間、道の次

第悪、見所はづる、なり。あを越をして長谷より巡初たるがよし<sup>(86)</sup>と、青越え伊勢北街道の利用を勧めている。「なら越」とは月本からの伊賀街道を指すが、こちらを推薦しない理由として、大和めぐりの最終地吉野までの距離が二里余長い、名所巡りの順序に不都合、コースから見所がはずれるという点をあげており、大和国内の観光地間での移動に不便ということであろう。一方、「いせやまとまわりめいしよゑつみちのり」(明和二年)では、「やまとまわりあんないわ、いせ月本より入て、いかうへの、なら、ほつけし、さい大し、しよ大し、にしの京とまわれハ、ミちにためなし。又はせごへハやまとの内にて七りのそん也」との記述がみえ、伊賀街道のほうが行程に無駄が無いとしている。しかし、その四年後に同じ版元から出版された『大和名所記』<sup>(87)</sup>には、「伊勢より下向ならへのミち▲いせ六けん茶屋より入て、あを・はせ・ならとまはりてよし▲いごへハ、いせ月もとより入て、いがうへ野・ならとまはりてよし」と、伊勢北街道を優先するような記述がみえる。

また、前掲『大和巡獨家内道中絵図』には、「大和巡り道筋心得」として、各方面からの大和観光の客に対応した道順が示されているが、なかでも参宮後に大和を巡るコー

スが最初に掲げられている<sup>(88)</sup>。

勢州両大神宮拝礼の後、宮川を渡り松坂へ出、六けんより大和はせ寺<sup>(89)</sup>出るをあをこへといふ、但シミヤ川よりはせ寺迄廿六り半。月本といふ所より大和南都へ出るを伊賀越といふ、但ミヤ川より南都迄二十八り。

あをこへ大和はせ寺迄出、名所巡り左の通りすれバ順路よし

はせ寺より みわ 在原寺 おびとけ 南都名所数々多

し 西大寺 招大寺 西の京 法りう寺 たつ田 た

いま寺 あべ あすか をか寺 たうの峯 上市いも山

せ山名所 吉の山 かうや山 大坂

右之通り廻るべし。

(中略)

伊賀ごへより南都へ出れば

西大寺 招大寺 法りう寺 たつ田 たいま寺 みわ

はせ寺 をか寺 たうのみね 上市 吉野山 こうや

山 大坂とめぐるべし。

ここでも、距離の違いを述べた上で、伊勢北街道と伊賀街道の両ルートを取り上げている。加えて、同絵図では、大坂方面からの西国巡礼者や高野参詣者に対しても、上市か

らの「高見ごへといふ伊勢海道」や、萩原からの「中街道」「あをこへ」、奈良からの「伊賀ごへ」「そまの川ごへ」といった伊勢への道を案内している。本図は、大和吉野の金紅丹という薬店が発行したもののためか、参宮客を大和へ誘致しようという姿勢が垣間見える。

これまでみてきたように、参宮後の大和入りに際しては、伊勢北街道と伊賀街道の利用が勧められており、伊勢本街道および伊勢南街道についての記載は認められない。<sup>41)</sup>伊勢北街道・伊賀街道は、東海道四日市から分かれた伊勢参宮街道の六軒・月本より大和へと分岐しており、参宮後の大和めぐりには、一旦北へ迂回するかたちとなる。伊勢本街道を利用すれば、最短距離で大和へ入れるが、先にも述べたように、伊勢本街道は八つの峠を抱えた難路であり、伊勢方面からは徐々に高度が上がるため、登り一方の峠が少なくない。そのため、参宮後の遊覧には適さないと判断されたのであろう。「朝日講定宿帳」<sup>42)</sup>でも、「御参宮相済候御方、大和めぐり被遊候へバ、元六軒迄御もどり被遊候。田丸ごへはせちかミちハ下の方ニくわしく御座候」と、大和への移動に、伊勢本街道は観光を伴わない直行路という表現をしている。

また、伊勢南街道については、『西国順礼道中細見新增補指南車』(文政十二年刊)に「いせより高野山へすぐ道」とあり、参宮後に高野山へ直行する場合のルートといった限定的な紹介である。南和や和歌山方面からの参宮は別として、遠隔地からの参宮者の利用は少なかつたと思われる。なお、同書は、西国巡礼を目的として編まれた案内記であるので、参宮後「伊勢山田より八鬼山越熊野那智山迄四十余の間名所旧跡手引案内」を別に設けて、田丸から那智までの熊野街道に多くの紙数を割いている。

伊勢参宮街道と伊勢北街道との分岐点である六軒には、「やまとめぐりかうや道」「大和七在所順道」と刻まれた道標が現存しており、伊賀街道との分岐点の月本にも「左やまと七在所順路」の銘を持つ同様の道標と、「右大和七在所道ならばせかうや道いがごえ本道」と刻まれた常夜灯<sup>46)</sup>が建つ。伊勢から六軒や月本を経て大和へ向かう者がいかに存在したかを窺わせる遺物であるが、残念なことに道標には年紀がなく、建立年は判然としない。

この「大和七在所」については、幕末から明治期にかけての案内記類にも散見でき、「東海道 秋葉風来寺 伊勢参宮 大和七在所 高野山道 月本南都越定宿附」<sup>47)</sup>という表題の付

いた定宿帳も発行されている。この定宿帳は刊記を欠いており、版行年は明らかではないが、裏表紙に「天保十三年寅三月吉日、武州埼玉郡山根庄海上郷騎西領上会下村、岡田性義運」「嘉永七年甲寅歳正月七日立三而二度目伊勢参宮ノ節持参仕候、岡田惣右衛門義運誌」と、当時の所持者による書き込みがあり、幕末には、大和七在所が観光地として既知の存在になっていったと思われる。

「大和七在所」が具体的にどこを指すのかについて、中村敏文氏は『榛原町史』の中で、「大和七在所とは大和の社寺を七ヶ所と違つて、長谷寺・吉野・奈良・法隆寺・奈良の社寺などで一在所と見なし、高野山巡り、大坂の住吉・天王寺詣で、石清水八幡参り、宇治・伏見巡り、京の社寺巡り、石山・三井寺参りの七在所で、平安時代に朝廷より特別な奉幣を頂いていた春日・大神など二十二社の大部分の神社も含まれる」と説明されている。<sup>48</sup>しかし、これは先に掲げた「七ざい所巡道しるべ旅行便覧」の叙に記された名所を誤って解釈されたものと思われる。前掲『東海道秋葉鳳来寺伊勢参宮大和七在所高野山道月本南都越定宿附』では、東海道四日市より伊勢へ入り、参宮後、「是より大和七在所めぐり六軒へ御もどり」、六軒から伊勢北

街道を萩原まで辿つて、初瀬・三輪・奈良へと進み、「是より七在所道」となっている。加えて、奈良から大坂への移動に際して悪徳案内人の勧誘に関する注意書きの中に、「奈良より大和七在所不残御参詣、高野山御廻り、大坂迄之道のり四十八り三御座候」という一文があり、大和七在所とは奈良から高野山へ至るまでの社寺めぐりを指しているものと考えられる。また、同じ講元から出された『伊勢山田宮本御講中行程表』<sup>49</sup>でも、奈良の項に「此所御参詣所多く、七在所奈良より御座候」とみえる。これらの案内記は、参宮後、六軒から伊勢北街道で萩原へ出、初瀬・三輪を経た後、奈良へ入つており、これらの案内記に従えば、大和七在所に初瀬・三輪が含まれていないことになる。

具体的に、七在所がどこを指すのかについては、意見の別れるところであろうが、七在所を「七つの地域」という具合に解釈して、『東海道秋葉鳳来寺伊勢参宮大和七在所高野山道月本南都越定宿附』の行程に従つて分類すれば、①法華寺・西大寺・菅原天神・唐招提寺・西の京（薬師寺）、②法隆寺・竜田、③達磨寺・染井寺（石光寺）・当麻寺、④安倍文殊、⑤飛鳥・橘寺・岡寺、⑥多武峰、⑦吉野ということにならうか。しかし、必ずしもこの七ヶ所に限つ

たものでもなかったのではないだろうか。先に取り上げた『大和巡案内道中絵図』には、「南都七大寺めぐりといふハ、元興寺興福寺東大寺西大寺招大寺西の京法隆寺、右俗三七在所めぐりともいふ」とある。<sup>(50)</sup>これは南都七大寺といひながら、いわゆる奈良時代の七大寺とは内容を異にしている。江戸時代に衰微していた大安寺を、見所から除いたためと思われるが、ここでいう七在所とは、奈良周辺の由緒ある七ヶ寺といった意味であろう。このように、案内記においても「七在所」の捉え方はさまざまで、「大和めぐり」を概念的に捉えたものではないだろうか。

いずれにしても、諸々の案内記において六軒の部分で、「大和めぐり」「大和七在所」の記述がみられ、大和観光へは伊勢北街道の利用が促されていたようである。これは、東国からの参宮には東海道四日市からの伊勢参宮街道が使用され、その道筋に位置する六軒が、荷物の預託など下向の際の大和めぐりにも、便利であったためではないだろうか。六軒が参宮後の大和めぐりの基地として、宿屋がサービスを向上させていった様子は、明治初期の定宿帳にみえる。明治十年（一八七七）の「一新講社定宿帳」に「六けん此宿ニテ大和めぐり道中記進上仕候」とあり、また、同

年に出された『真誠講定宿帳』にも、「六けん大和七在所道西京大坂へ御通りの身ハ、御荷物御預ケ置便利也」とあって、参宮後大和から京都や大坂へ向かう客への配慮が窺える。同じく伊勢参宮街道の月本より分岐する伊賀街道において、このような記載は確認できないことから、伊勢北街道では宿屋と講・版元などが協力して、参宮客の動員に広報活動を展開していたことも考えられる。

また、東国からの参宮に限らず、大坂方面からの参宮の際には往路に奈良見物をするのが通例であったし、西国筋からの参宮の場合にも、大和めぐりは行われている。<sup>(51)</sup>ちなみに、大和からの参宮の場合も、往復同ルートを辿ることはほとんどなく、参宮後多くは京都の杜寺めぐりや多賀参詣、熊野参詣に出かけている。<sup>(52)</sup>

このように、伊勢参宮と大和めぐりは一連のものとなつて行われ、庶民の参宮が娯楽化していくのに伴って、東国からの参宮者に便利な伊勢北街道の利用が増大していったものと考えられる。

## おわりに

江戸時代における大和・伊勢間の参宮ルートの変遷と、伊勢街道と大和めぐりの関わりについて、道中案内記類から考察し、検討を加えた。伊勢本街道は、文政期には、駒坂越えの伊勢街道を指す固有の名称として認識され、伊勢への最短ルートとして、江戸時代を通じて利用されていた。一方、伊勢北街道は、伊勢本街道に比して距離は長いが、峠が少なく、旅の大衆化とともに利用が増加した。その結果、利用の急増した伊勢北街道に対して、駒坂越えの伊勢街道が、元来の伊勢への道という意味で、伊勢本街道と称され周知のものとなっていったと考えられる。また、伊勢北街道の利用増加の背景には、庶民の旅のスタイルや伊勢参りに対する意識の変化が考えられ、参宮という目的を果たすための旅から、好奇心を満たすための道中を楽しむ旅へ、旅の様式の変化が街道の利用にも影響していると思われる。加えて、参宮後の観光が一般化し、東国からの参宮客の増加や六軒の宿屋の活動とも相まって、伊勢から奈良への大和めぐりのルートとして、伊勢北街道が利用され、明治期

になっても存続した。大坂・奈良方面からの参宮については、伊勢本街道・伊勢北街道の選択は、参宮者自身に任せられる感があるが、参宮後の大和入りについては、伊勢北街道への誘導が圧倒的に多いことも判明した。すなわち、江戸時代において伊勢本街道は、西方から伊勢神宮へ向かう参拝のための道という捉え方をしているのではないだろうか。

なお、街道の利用の実態に関しては、道中日記など当時の記録からの事実関係の確認が不可欠であるが、今回は案内記からの事実確認に留めた。また、ルートの変遷については、津藩や歌山藩などによる街道政策や、道路の整備状況などの側面からの検討も必要であると思われるが、これらの点については今後の課題としたい。加えて、大和めぐりにについても、大和国内でのルート確認など、検討課題が残るが、この点についても別稿を期したい。

最後に、大和・伊勢間の伊勢街道の現状について、少し触れておきたい。文化庁により進められた「歴史の道」調査・整備事業や、近年の街道ブーム、あるいは、町おこしといった視点などにより、奈良・三重両県においても整備された部分が少なくない。案内板や道標などの設置も進め

られてきたが、立地の関係か、必ずしも適切な場所に建てられていない。また、道路工事等により、撤去されたり移設された江戸期の道標や常夜灯も多く、原位置に復されたものもあるが、設置方向を誤って復原されたため、指向方向が全く逆になってしまった道標もみられる。

伊勢本街道は、江戸時代の姿を多く留めた数少ない街道であると思われる。道中案内記などに記された八つの峠のうち、石割峠の一部と牛峠（神末峠）を除き、未舗装のまま保存されている。しかし、この二十年間に、国道のバイパス工事が進み、三重県では、飼坂峠下にトンネルが開通し、美杉村奥立川付近においてもバイパスにより旧道が一部消滅、櫃坂（松阪市飯南町）でも工事にともなって、集落内の景観は一変した。一方、奈良県宇陀郡御杖村では、バイパスの大部分が、旧道とは別に敷設されており、集落内への大型車の流入が減り、かえって保存しやすい環境となっている。

また、伊勢北街道は、明治以後の鉄道敷設や現国道一六五号線により大部分が車道となっている。奈良県においても三重県においても、集落内の旧道は国道から少しはずれ、とくに宿場であったところは比較的よく保存されている。し

かし、開立坂（名張市）や七見峠（上野市）のように、住宅地やゴルフ場の開発に伴って消滅してしまった部分も存在する。これらの現状に対して、歴史的な認識を深めることも重要であろう。さらなる保存と活用を期待したい。

## 註

(1) 小野寺淳「道中記にみる伊勢参宮ルートの変遷」(筑波大学人文地理学研究)一四、一九九〇年、田中智彦「大坂廻りと東国の巡礼者」(歴史地理学)一四二号、一九八八年)小松芳郎「道中記にみる伊勢参詣―近世後期から明治期を通して―」(信濃)三八―一〇、一九八六年)、桜井邦夫「近世における東北地方からの旅」(駒沢史学)三四、一九八六年)など。

(2) 奈良県教育委員会編「伊勢本街道―奈良県「歴史の道」調査報告書」(一九八五年)、奈良県教育委員会編「横大路(初瀬道)―奈良県「歴史の道」調査報告書」(一九八三年)、三重県教育委員会編「初瀬街道・伊勢本街道・和歌山街道歴史の道調査報告書」(一九八二年)、三重県教育委員会編「大和街道・伊勢別街道・伊賀街道歴史の道調査報告書」(一九八三年)などの報告書が公刊されている。

(3) 伊勢北街道・伊勢本街道・伊勢南街道について、『日本歴史地名大系三〇 奈良県の地名』(一九八一年、平凡社)三〇―三一頁では、伊勢街道の見出し項目の中で、伊勢北街道・

本街道・南街道（紀州街道）と記載されているが、『日本歴史地名大系二四三重県の地名』（一九八三年、平凡社）三〇―三二頁においては、初瀬表街道・初瀬本街道・和歌山街道という見出しで各項目を掲げている。また、『東吉野村史』通史編（一九九二年）一五〇頁では、伊勢街道北路・

中路・南路と記載されている。さらに、伊勢本街道について、吉井貞俊氏は「御杖越え伊勢参宮街道」（『神道史研究』一九一四、一九七一年）の中で「御杖越」と称されており、

神野清秀氏は「伊勢街道踏査六二七軒」（『皇学館大学紀要』二一、一九八三年）で「伊勢参宮本街道」と称されている。

なお、本稿では、萩原から名張―青山峠―六軒ルートを経た伊勢北街道または青越え、萩原から赤壇―飼坂峠―田丸―トを伊勢本街道または飼坂越え、五条―鷲家―高見峠―田丸を伊勢南街道と称する。

(4) 奈良県教育委員会編『伊勢本街道―奈良県「歴史の道」調査報告書』（一九八五年）一四頁。

(5) 『伊勢道中細見記』（宝暦十三年刊、奈良大学文学部史学科蔵）の萩原の項に、「あかばにかいどう」「赤壇道」、「諸国案内旅雀」（享保五年刊、今井金吾監修『道中記集成』第五卷、大空社刊所収）と「七ざい所巡道しるべ旅行便覧」（享和二年刊、『道中記集成』第一九卷所収）の萩原の項に「長谷越」、「辛講定宿帖伊勢道中案内」（明和五年刊、前掲（4）所収）に「かい坂越」とみえる。

(6) 前掲「七ざい所巡道しるべ旅行便覧」に、「六軒屋越」、「諸

国案内旅雀」に「なんばり越」とある。

(7) 『道中記集成』第二四卷三八頁。

(8) 『大和巡独案内絵図』（刊記なし、『道中記集成』第三八卷所収）に、「たかみこへ伊勢田丸より大和上市まで廿三里」とみえる。

(9) 近代の名称については、明治二十八年刊行の『大日本管轄分地図』奈良県に「奈良上街道、起点奈良、經由地三輪・初瀬・三本松、到達三重県境、道程九里三十二丁」「伊勢中街道、起点榛原、經由地内牧・山柏、到達菅野、道程七里二十二丁」、同三重県に「大和街道、起点関、經由地加太・柘植・上野、到達京都府界、道程十里二十丁」「伊勢別街道、起点関、經由地椋本・窪田、到達津、道程四里三十丁」「伊勢街道、起点日永、經由地神戸・白子・津・松坂、到達山田、道程十八里余」「初瀬街道、起点三渡、經由地二本木・阿保・名張、到達奈良県境、道程十四里十丁」「和歌山街道、起点松坂、經由地大石・七日市・波瀬、到達奈良県境、道程十六里三丁」（「街道名称なし」）起点津、經由地長野・平松・平田、到達上野、道程十二里十二丁」（「街道名称なし」）起点月本、經由地久居・羽野、到達五百野」とある。これによれば、奈良県において飼坂越え伊勢本街道は「伊勢中街道」と称されており、また、青越え伊勢北街道は、奈良県では「奈良上街道」、三重県では「初瀬街道」の公称が付されていたことがわかる。

(10) 『道中記集成』第四一巻一七〇頁。



街道より分岐し、五百野から長野峠を越えて、上野で加太越えと合流する。一方、加太越えは、東海道関より分かれて、柘植・佐那具を経て、上野へ出、島ヶ原・大原原・笠置・加茂から奈良へ至る。

(32) 東吉野村史編纂委員会編『東吉野史』史料編上巻(一九九〇年)七九七～七九八頁所載の天保三年「高見峠道直シ寄付帳」から、当時の困難な通行の様子が窺える。

(33) 前掲(1)小野寺氏論文によると、道中日記九五点調査のうち、伊勢神宮往復のみの道中日記は一点しか存在しないという。

(34) 『道中記集成』第一九卷一五九頁。

(35) 前掲(1)小野寺氏論文では、関東からの参宮例のうち、往路東海道で伊勢へ入り、参宮後、奈良・大坂・京都の社寺を巡って、帰路を中山道に求めるものを「伊勢参宮モデルルート基本型」と命名されている。また、大田区立郷土博物館編『特別展図録 弥次さん喜多さん旅をする』(一九九七年)に、江戸期の道中日記より一〇〇例の旅の行程が示されているが、その多くは参宮後大和を巡っている。

(36) 『道中記集成』第一九卷二七六頁。

(37) 前掲(4)三頁所載。

(38) 奈良大学文学部史学科蔵。内題は「大和国奈良井国中寺社名所旧跡記」(明和六年、井筒屋庄八版行)。なお、井筒屋庄八は、絵図屋庄八とも名乗っており、前掲(37)と同じ版元である。

(39) 『道中記集成』第三八卷一七四頁。

(40) 笠間越え・名張街道とも称する。奈良より鉢伏峠・一台峠を越えて、杣ノ川へ出、笠間峠を越えて名張で青越え道と合流する。

(41) 前掲(1)小野寺氏論文中で、「伊勢参宮モデルルート基本型」と分類された道中日記では、一例を除いてすべて、伊勢から奈良へのルートに伊勢北街道・伊賀街道のいずれかを通行している。

(42) 『道中記集成』第四二卷三〇二頁。

(43) 『道中記集成』第二四卷三七頁。

(44) 三重県松阪市中林町所在。

(45) 三重県松阪市中林町所在。

(46) (45) 同所所在。(明治二十六年三月銘)

(47) 奈良県立大学蔵。また、同じ講元より出された「東海道秋葉風来寺伊勢参宮 大和七在所高野山道長谷南都越定宿附」(奈良大学文学部史学科蔵)という定宿帳も存在する。

(48) 榛原町史編纂委員会編『榛原町史』本編(一九九三年)八七七頁。

(49) 『道中記集成』第四四卷三八一頁。

(50) 『道中記集成』第三八卷一七四頁。

(51) 奈良大学文学部史学科蔵。

(52) 『道中記集成』第四四卷二二六頁。

(53) 『道中記集成』第一三卷所収の広島太神講の道中案内記(安永四年刊)は、広島から中国路を経て大坂へ、その後奈良・

三輪・初瀬を巡って伊勢本街道を伊勢まで辿り、参宮後帰路は、小俣より伊勢別街道を経由し、関から東海道を京都へ出るといふ行程である。

(54) 前掲(23)『桜井市史』史料編下巻九五一～九五八頁所収

「伊勢参宮道中日記」、王寺町史編集委員会編『新訂王寺町史』資料編(二〇〇〇年)四九七頁～五〇六頁所収「伊勢参宮道中日記」、安堵町史編集委員会編『安堵町史』史料編下巻(一九九一年)九二一～九二六頁所収「伊勢参宮道之記」、東吉野村史編纂委員会編『東吉野村史』史料編上巻(一九九〇年)七九九～八〇八頁所収「伊勢熊の道中記」等の道中日記による。

(55) 奈良大学では、文学部史学科日本近世史研究室(鎌田道隆

教授)が中心となつて、昭和六十二年より現在まで毎年、伊勢本街道の踏査を行っている(筆者も平成元年より同行)。その成果やデータは、奈良大学鎌田研究室宝来講道中細見記作成委員会編『宝来講道中細見記』(一九九四年)などにまとめられている。また、伊勢北街道・伊勢南街道・伊賀街道については、平成十五年より現地調査を行った。